

## 学校サイトを介した学校外部評価(学校サイト活性度評価)

豊福 晋平(国際大学グローバル・コミュニケーション・センター)

1995年以降インターネットの普及拡大にあわせ、学校ウェブサイト(以下、学校サイトと記す)の数が増加している。本研究では、学校サイトは学校が自律的に運営可能な情報発信手段であり、学校全活動のアカウントビリティを果たすものと捉え、学校に関わるステークホルダの観点から、学校サイトを介した学校外部評価を継続して行っている。

本稿は、研究の背景と方法、意義についてまとめるものである。

### 学校サイト研究の背景

従来の学校広報とは異なり、学校サイトは、基本的に各学校の自律的な運営に任せられ、情報を必要とする利用者に対して、迅速かつ直接情報提供できるというメリットがある。すなわち、学校側がウェブサイト上で活動を高頻度で積極的に開示すれば、きわめて高いアカウントビリティが果たされる。

本研究では、まず、学校運営に関わるステークホルダを広範なものと考え、外部評価とは、噂を含んだ当該学校の社会的評判の形成を担うものと捉える。さらに、評価の妥当性と一般性を求めるために、社会に対して広く開かれた学校サイトのみを有力な情報源として、客観的な評価を行うものである。

### ステークホルダ視点からの評価観点

学校サイトを介した外部評価の観点としては、1) 評価が総合的網羅的に学校の特徴や状況を反映すること、2) 全てのステークホルダに対して意義があること、3) 客観的な評価観点であること、4) 外部透明性の原則から、第三者が常時評価可能であること 5) 被評価者が評価をトレース・フィードバックできること、の5点が挙げられる。

これらの観点をもとに、学校サイトを介した学校外部評価として、A) 学校サイトの網羅的内容評価(質的評価)と B) 学校サイト活性度評価(量的評価)の2側面からの評価を行っている。

### 網羅的内容評価(質的評価)

2003年から開催されている全日本小学校ホームページ大賞(通称:J-KIDS大賞 <http://www.j-kids.org/>)は、全国の小学校サイトを対象に、応募不要・予告なし勝手選考を行うコンテストである。構造化された約70項目の客観指標を用い、約1000名強の社会人ボランティアの参加により、オンライン・データベースを用い、約1万6千件の評定を行う。この評価基準と統計データは毎年開示されており、学校サイト運営者による自己採点とフィードバックが可能である。学校サイトはアカウントビリティに直結するとの姿勢から、客観指標はウェブサイトの技術的側面よりは、むしろ、教育活動や学校運営姿勢に関わる項目が多く含まれており、主催側としては、学校サイトを介した学校全体(学校経営)の表彰を目指している。

### 学校サイト活性度評価(量的評価)

ウェブサイトの更新頻度は、サイト活性度には最もシンプルで妥当性が高い指標である。一般に、情報の更新頻度が高いほど、情報の信頼性・外部透明性も高くなるものと考えられる。ただし、更新履歴は貴重なデータでありながら実際には失われやすく、研究的価値からみても第三者がデータ収集・蓄積する意義は大きい。

著者の研究サイト*i-learn.jp*(<http://www.i-learn.jp/>)では、学校サイト(対象約3万2千件)・トップページの更新状況把握(12時間おき)と情報蓄積を2000年から行っている。収集した更新実績は*i-learn.jp*サイト上で各学校にフィードバックするほか、概要情報や学校サイト活性度ランキング(過去90日間の更新日数)をまとめ、公表している。ちなみに、2006年4月時点で週5日以上更新している学校サイトは、全国で385件存在する。

学校サイト活性度評価結果は都道府県、自治体別にもまとめられていることから、従来の文部科学省調査によるインフラ・ハードウェア整備面とは異なる、実質的な情報化利活用面の指標として注目される。

### 学校サイトを介した外部評価のメリット

以上のような学校サイトの外部評価は、次のようなメリットをもたらすと考えられる。

1) 外部評価により学校サイトの重要性が認識され、学校の自律型メディア活用の啓蒙普及がはかられる。 2) 学校への直接的なフィードバックにより、管理職・教職員の動機付けと自己効力感の向上を促す 3) 学校サイト充実に促進することで、ステークホルダの情報開示要求を満たし、学校に対する信頼と支持の獲得につながる。 4) 従来埋もれがちであった学校の地道な取り組みや成果を発掘し、着実に実績をあげている学校や自治体教育委員会を抽出することができる。